

広がる薬局の地域活動

一歩踏み出す業務を展開

日本薬局管理学会

第3回日本薬局管理学会年会在6日、都内で開催された。研究会では、地域での患者教育等の多様な健康支援活動、吸入器の使用実態調査を踏まえた患者指導、高校生を対象にした「薬育」の試み、電話相談を含め24時間の処方せん応需体制の進捗状況など、従来型の調剤業務から一歩踏み込み、積極的に地域貢献を推進する薬局の姿勢がみられた。

研究発表では、ナカシマ薬局深川店から、高齢者の吸入器の使用実態調査とその結果に基づいて、独自に吸入手技などをまとめた「指導せん」を用いて、指導する試みが紹介された。

吸入器使用を支援
同薬局では月に3800枚の処方せんを応需し、うち約70人の患者が吸入剤を

使用し、半数以上が高齢者。最近では代理の人が薬を取りに来るケースや、一人暮らしの老人も多く、コンプライアンス改善が課題になっていった。また、薬剤師の経験や技量によって、指導にバラツキが出てくるなどの問題点があった。そこで、2007年6月から2カ月間、65歳以上を対象に、病名は問わず、吸入剤を使用している患者にアン



薬局業務をめぐる討論された

ケートを実施した。その結果、実際には正しい吸入方

法が理解できていない例が多く、自己流で間違った使用方法を続けている患者も見られた。また、吸入薬ごとに操作状況を調べると、種類に関係なく「吸入後の息止め」「吸入直前の呼吸」ができていない患者もいた。こうした患者に対し、アンケート後に正しい使用を指導、さらに吸入薬ごとに、患者の状況を考慮した注意事項も付記した、独自の「指導せん」も渡したところ、再来局時にはかなり改善しており、手技などへ

の理解不足に対し、きめ細かく支援することの重要性が示された。

他職種とも連携

また、地域の中で広く糖尿病教室、健康教室などに取り組んでいる山本健康薬局、平野薬局から、その現状が紹介された。

山本健康薬局では99年から糖尿病教室、栄養相談、介護教室、さらに今年度からフーフアリン教室を加えるなど、患者教育に取り組んできている。このうち介護教室は、ホームヘルパーによる実践的講習会が主体となっており、発表した山本新一郎氏は、「ヘルパーの知識を借りたいので、場所を提供し、活躍してもらっている」と、薬局というインフラをベースに、多職種連携が根底にあることを示した。介護者からの要望に応じて開催したものだ

が、実際には「介護者は忙しくて参加できていない」のが現状で、むしろ薬剤師とヘルパーとの交流が有意義であったとした。

一方、平野薬局では特定保健指導を念頭に、食事・運動・禁煙などの支援充実を図るため、年4回健康教室を実施している。特定保健指導メタ対策では、働き盛り世代が大きなターゲットとなっているが、健康教室は会場の都合で適当な時間帯の設定が難しく、退職者世代が参加者の中心となったことや、その9割が

女性だったこと、点だったという。また、同薬剤師自らが地域で取り組みとして、

継続するために、活動する必要があること、の形でも継続する必要があること、

次世代視み活動充実

「法人化」で新たな

石塚会長 年々開催に先立ち、あいつつした石塚英夫会長（望星薬局）は、同研究会が6月10日付で特定非営利活動法人として内閣府より認証されたことを報告した。報告の中で、「次世代に調剤のあり方を研究し、研究会運営に」と述べた。

くなどが反省

同では、薬剤
に出る行く取
介護職員向
介護教室、地
界まりなどで

学校PTA
門について講
呼みも始めて
に曾我部憲枝
これらの地域
悉に結びつけ
迎へ、活動を
は、何らか
に取組む必
を強調した。

八 な 出 発

告すると共
つけた分業、
を検討してい
思いを新たに
三たる決意を

石塚氏は厳しい医療環境
の中で、薬剤師職能を通じ
て、どう医療費適正化問題
に対応していくかを課題と
して挙げ、その典型とされ
るジェネリック薬推進につ
いては、「それだけが薬剤
師職能、職責か」というと疑
問に思う。相対的に効率化
を考えていく必要がある、
その焦点の一つは、かかり
つけ薬局”として後期高齢
者に対する的確な服薬・薬
歴管理だ」と述べた。

さらに「Webも、2・
0」といいういま、医薬分業
も、2・0時代”で、調剤
の概念も大きく変化してい
る。単純に言えば、薬によ
るADL低下などの面で、
薬の整理あるいは処方せん
内容についての提言などへ
の努力が必要」とし、委員
会活動の活発化など、次代
の薬剤師業務構築に向け
て、活動を充実させたいと
の方針を示した。